

慶山林堂遺跡出土古碑の内容とその歴史的背景

篠原 啓 方

The Contents of Ancient Imdang Inscription and its Historical Background

SHINOHARA Hirokata

At the beginning of the 6th century AD, the local communities of Silla were governed by local officials dispatched from the six clans of Gyeongju as well as the leading potentates living in these communities. Under such circumstances, in Yeongcheon and Daegu, water utilization projects were carried out, led by lower-ranking officials from the six clans. The ancient Imdang inscription in Gyeongsan, discussed in this paper, is considered to include records concerning water utilization projects in the 6th century. Therefore, the ancient Imdang inscription is worthy of attention as a valuable historical artifact that indicates how a group of central technicians had penetrated into local communities, the negotiations these technicians had with local potentates, and how their techniques had been transmitted. However, the ancient Imdang inscription is deemed to have been created by local potentates, and thus have slightly different characteristics from other artifacts.

キーワード：新羅(Silla), 慶山(Gyeongsan), 林堂(Imdang), 碑文(Inscription), 六部(Yuk-bu[Six Clans]), 中古期(Middle age of Silla Dynasty), 6世紀(6th century)

はじめに

慶山の林堂洞遺跡で十数年前、新羅時代のものと思われる石碑が見つかった。林堂古碑と呼ばれているこの石碑は、発見から久しいが、韓国においてもあまり注目されてこなかった¹⁾。その原因は、遺跡の正式調査報告書が未刊であったこと、そして碑文の摩滅がひどく内容の把握が困難であったことにあると思われる。

筆者は十数年前、嶺南埋蔵文化財研究院（現嶺南文化財研究院）の発掘現場でこの碑を見学する機会を得た。そして昨夏、今度は調査の名目で同院を訪れ、その際に碑に関する原稿執筆を依頼され、報告

1) 筆者の知る限りでは、韓国国内で行われた2つの特別展図録に、同碑が紹介されている。国立大邱博物館『押督사
람들의 삶과 죽음』, 2000年, 国立慶州博物館『文字로 본 新羅——新羅人の 기록과 筆跡——』, 2002年

書に簡単な考察を書かせていただいた²⁾。本稿では、その考察内容をもとにやや踏み込んだ解釈を加え、林堂古碑の史的背景に関する私見を述べてみたい。

一 林堂洞遺跡の沿革と林堂古碑³⁾

1 林堂洞遺跡について

林堂洞遺跡は、慶尚北道慶山市造永洞522番地一帯の低丘陵地にある。慶山市は洛東江の支流である琴湖江の中流に位置している（図1）。同地域が林堂宅地開発事業地区に指定されたことを受け、開発の事前調査として、1993年の試掘の後、1995年から本格的な発掘が行われた。嶺南埋蔵文化財研究院による調査はF～I地区で行われ、石碑はI地区において見つかった。

慶山地域には三国時代の古墳群が散在しており、林堂洞遺跡には林堂洞古墳群（史蹟第300号）・造永洞古墳群（史蹟第331号）という、高塚古墳と呼ばれる大型の墳丘を有する古墳群が隣接している。また近隣地域には土城や山城が分布している。慶山は慶州から大邱方面に抜ける最も平坦なルート上に位置しており、ここが権力者の拠点であるとともに交通の要衝であったことをうかがわせる。

文献史料によると、この地域には押督国があり、新羅の婆娑尼師今の23年（102）、その国王が降伏を申し入れてきたという⁴⁾。この記事を紀年どおりに用いることはできないが、この地に小国とよばれるような政治勢力が存在していたことは、上記の考古資料からも明らかである。

林堂古碑が見つかったI地区からは、三国時代～統一新羅時代の住居、溝状遺構、建物、竪穴、柱穴、



図1 林堂洞遺跡の航空写真（Google マップより）

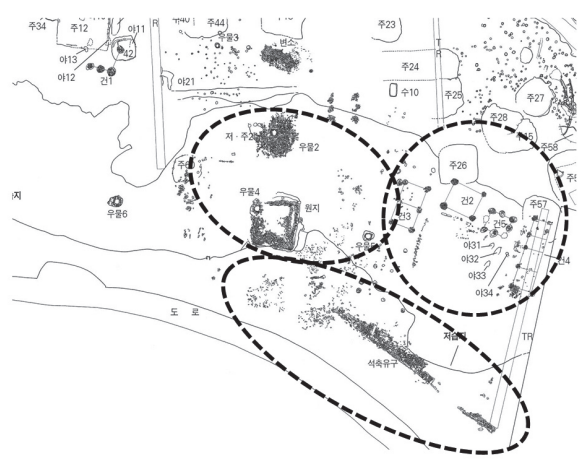


図2 林堂洞遺跡I地区
（碑石出土地域のみ。北は上。円内は、左が井戸・園池、右が建物址、下が排水路と敷石遺構）

2) 嶺南文化財研究院『慶山林堂洞I地区建物址遺跡——三国時代・近代——』（嶺南文化財研究院学術調査報告第153冊）。同報告書は2010年3月に刊行される予定である（以下、報告書と略称）。

3) 遺跡の概容については、嶺南埋蔵文化財研究院『慶山林堂遺蹟現場説明会（2次）資料』、1996年、および注2の報告書を参照して作成した。

4) 『三国史記』巻1，新羅本紀1。「秋八月…，悉直・押督二国王来降」

園池、井戸などが検出された⁵⁾。古碑はⅠ地区の西南部にある排水路・敷石遺構西端の攪乱層付近で発見されたという（図2）。敷石遺構については、歩道施設の可能性が指摘されている。周辺遺構から出土した土器編年は5世紀～9世紀と幅広いが、中心年代は6世紀の第1四半期～7世紀の第2四半期だとされている。

2 林堂古碑の外観と釈文

碑石は現存高66.7cm、幅32.7cm（最大値）、厚さ20.2cm～6.5cmで、材質は花崗岩系である（図3）⁶⁾。これに近い大きさの石碑として「明活山城作城碑」（図4⁷⁾、551年、高65cm、幅31cm、以下明活碑と略称）と「南山新城碑第3碑」（図5⁸⁾、591年、高81cm、幅31cm、以下新城3碑と略称）があり、いずれも新羅の都であった慶州で発見された6世紀の石碑である。

碑文が確認されるのは一面のみで、これを便宜上前面としておく。右側面は前面とほぼ直角をなして

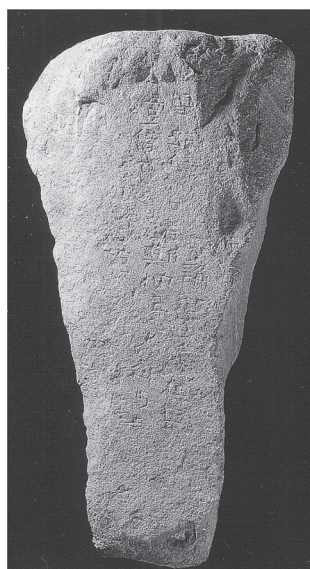


図3 林堂古碑の写真と拓本（注6に出典）



図4 明活山城作城碑

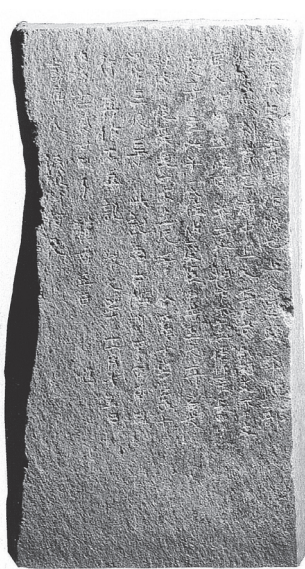


図5 南山新城碑第3碑

おり、面も平らに整えた形跡がみられるが、文字は確認できない。いっぽう左側は、前面からゆるやかな弧を描きつつ後面につながっており、前面と左側面の境界線が不明瞭であるが、碑石の幅の断面図によっておよその見当がつく（図6）⁹⁾。まず上部の断面図をみると、上辺が右から左上に向かい、約3分の1の地点から3分の2の地点までほぼ水平をなし、左下に弧を描きつつ下辺につながる。また下部の断面図をみると、上辺は全体的にほぼ水平をなし、左端で左下へと折れている。両図面の水平をなす

5) 報告書（前出）

6) 写真は国立慶州博物館『文字로 쓴 新羅』（特別展図録）、2002年、拓本は報告書（前出）

7) 国立慶州博物館（前出書）

8) 国立慶州博物館（前出書）

9) 報告書（前出）

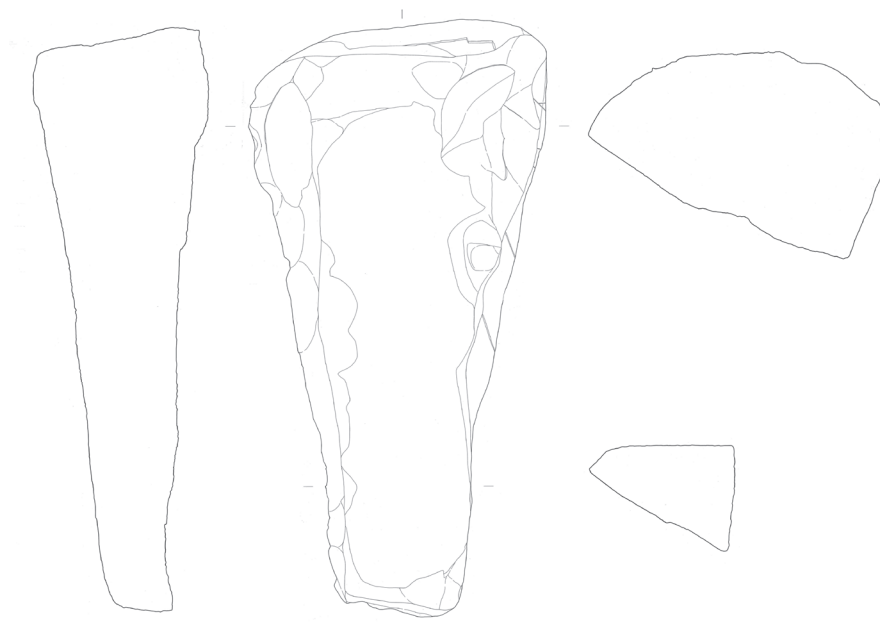


図6 林堂古碑図面

区間はほぼ同じ長さであり、これが前面における碑文が刻まれた範囲（幅）を指しているものと考えられる。

上面についてみると、表面に凹凸や剥落がみられるが、碑石高の断面図からも水平に近いことが分かり、おおざっぱに水平加工した痕跡が認められる。したがって現存する上面は、碑石製作当時の上面とみて問題なさそうである。

下面についてはやや検討が必要となる。現在前面で確認される最下の文字から碑石の下面まではおよそ15cmあり、この長さは全高のおよそ2割強である。これは碑石を立てる際、地中に埋まる部分と考えられるが、こうした様式の碑石は6世紀に多くみられる。全高に対する埋没部分の割合は他の石碑と大差ないといえるが、問題は下部の幅と厚さである。林堂古碑の前面の幅は上部から下部にかけてしだいに狭まるが、最下部の幅と厚さは上部の約3分の1であり、面積にするとさらに小さく、碑石を立てるための構造としては極めて不安定である。これに対し6世紀の石碑は、碑文面の幅が林堂古碑のように上下差がなく、側面は薄く平らな板形がほとんどであり、下部への荷重は同碑よりも少なく安定しているといえよう。そのように考えると、林堂古碑の下部は製作当時のものではなく、剥落や損壊によって縮小した可能性がある。一つは後面下部の損壊である。下面の写真をみると、下辺が左上に延びて左側面の辺とつながり、左辺がきわめて短い四角形をなしているが（図7）、本来はこの左辺がさらに下方へと延びた位置で下辺とつながっており、上面（図8）のような台形をなしていた可能性である。もう一つは下部が現在よりさらに長く、地中に深く差し込んで倒れるのを防いだ可能性である。現状ではこれらの正否を判断する材料はないが、同碑が「立てる」ものであることを前提にすれば、物理的にそうせざるを得ないように思われる。少なくとも碑文がさらに下へと続き、地中に埋まる部分が現存の15cmより短かったとは考えがたい。以上の点から碑文の最下部は現在文字が確認される位置だとみなして問題ないと思われる。



図7 林堂古碑下面



図8 林堂古碑上面

このように碑石は、様式においては6世紀の新羅碑に類例が多く、また下部の損壊の可能性を残しているが、碑文が刻まれた面が大きく損なわれた可能性は低いものと思われる。

筆者による林堂古碑の釈文は次の表のとおりである。

前述のように碑文の範囲は現存の前面の中に収まっていたと考えられるが、摩滅や剥落による脱漏の有無を確認しておく必要がある。まず前面の「喙」（3-①）と「壹」（4-①）の上部は碑文面よりも一段高くなっており¹⁰⁾、その表面は碑文面より粗く文字の痕跡も確認されない。そのため碑文の各行は、上記の2文字より上から始まる可能性は低いものと判断される。また下部については前述のように、3-⑬より下には字画が確認されない。下部が地中に埋められた可能性を考慮すると、これより下に文字はなかったと考えて問題なかろう。

次に碑文の開始部分であるが、第1行に「日」（1-⑦）が確認される。この「日」が日付にかかわる内容だとすれば、この上部に干支年、某月、某（日）の語が入ることになり、少なくとも6文字分の空間が必要となるが¹¹⁾、第3、第4行との比較でみると、「日」はほぼ第7文字目にあたる。いわゆる新羅の中古期（6世紀初～7世紀中葉）に製作された碑文は第1行の冒頭に干支年の入る例が多く、林堂古碑の右端の行もまた碑文の開始行であり日付が記されていたと考えて問題なさそうである。なお「日」の下部には字画とおぼしき痕跡もあり、第1行はさらに下へと続いていた可能性がある。

碑文の最終行については、第4行が手がかりとなる。第

表1 林堂古碑の釈文

4	3	2	1	
壹	喙*			①
借	起*			②
□	任*			③
之*	習*			④
令*	𠂔*			⑤
右	斯	□		⑥
尺	彼	論	日	⑦
	己	洹*		⑧
	□	百*		⑨
	𠂔	𠂔*		⑩
□	柯*	得*		⑪
其	与	□		⑫
	𠂔			⑬

〈凡例〉

- ・*は文字の残画をもとに推読した文字
- ・□は文字の跡が確認されるが不明の文字

10) これは碑石高の断面図からも確認される。

11) 干支年を干支のみであらわす事例を考慮すると5文字の可能性もある。

4行は、4-①～⑦にかけてはほぼまっすぐに文字が刻まれてはいるが、第3行との間がしだいに広がっていく(図3)。そして下部に至ると、第3行にかなり近接した位置に文字が刻まれている(4-⑪～⑫)。この4-⑪～⑫の上部にも字画と思われる跡があるが、4-⑦と3-⑦の間にある幅は一文字分もなく、また文字の痕跡もない。したがって下部の文字は4-⑦とつながる語句(第4行目)とみて間違いない。

このように第4行がまっすぐに刻めなかったのは、まず4-⑦の次に文字を刻む空間がなかったことに起因する。これはつまり前面の左側、少なくとも碑文が刻まれるべき面が製作当時から現在のような形態であったことを意味する。そしてもう一つは、4-①～⑦の方向が左にずれたためである。碑文を刻むにあたっては、刻字における失敗を避けるため、まず碑面に朱液などを使って文字を書く(朱書、丹書)ことが多いが、丹書をなぞるように字を刻んでも失敗する例はあったであろう。だがここでの失敗は、書体ではなく行の方向そのものにある。丹書の目的が第3、4行を縦にそろえずに書くことだったとは考えられず、だとすればやはり刻字に際して丹書そのものが存在しなかった可能性を考えるべきであろう。丹書の工程を認めるとしても、本来の役割や意味が無視されたことになり、知識や技術の拙さを指摘せざるをえない。いずれにせよ下部においては第4行の次には行が存在しなかったと考えてよい。第4行の上部も「壹」(4-①)、「借」(4-②)の左には文字の痕跡が確認できない。これらの点から、林堂古碑の碑文は全四行で構成されているとみてほぼ問題ない。

以上のように碑文の範囲が特定できるならば、碑文の本来の文字数は前掲の釈文表にほぼ収まることになる。したがって林堂古碑の総字数は一行13字前後×4行となる。

ところでこの字数は、ほぼ同じ大きさの石碑にくらべるとかなり少ない。前述の明活碑は一行22字(最大)×9行(計147字)と林堂古碑の3倍弱、新城3碑は一行23字(最大)×6行(計118字)と2倍強ある。この2つの碑が古碑にくらべ多くの文字を配することができたのは、碑文面のほぼ全体を水平に整え、文字を小さく整然と刻んだからである(図4、5)。

これに対し林堂古碑は、画数が多ければ文字が大きくなり、少なければ小さくなる傾向にある。これは縦横(行と列)をそろえることが念頭に置かれていなかったためと思われる。丹書がほどこされなかった可能性が高いことを考えると、文字のバランスの悪さは当然ともいえよう。明活碑と新城3碑の製作工程に丹書が存在したとは断定できないが、あったとすれば碑文製作の知識や工程において、なかったとしても刻字の技術において林堂古碑との格差が存在したことになり、両者の優劣は明らかである。なお筆画の場合、林堂古碑には楷書・隸書の影響がともにみられるが、刻字技術の未熟さを考慮すると筆画から書体を特定するのは困難に思われる。

以上、林堂古碑の製作技術と書体、刻字について考察した結果、林堂古碑は6世紀の石碑との類似性をもつが、慶州の諸碑にくらべ石碑製作の知識や技術が低いことが分かった。ただ林堂洞遺跡の位置する慶山と新羅の都であった慶州との距離を考えると、文化の伝播に大きな時間差は想定しがたい。したがって製作技術面のみからいえば、古碑の年代は6世紀代とみておおよそ無理がないものと思われる。

二 碑文の内容

碑文は文字数が少なく判読も困難であり、前後の文脈がとりにくい。そのためここでは判読が確実な

語を中心に、推読された文字によって文脈を再構成し、全体像の復元を試みたい。

前述のように、碑文の文字総数は一行13字×4行前後であった可能性が高く、この短い碑文の中に日付、主体、行動、そしてその結果が盛り込まれていることになる。ならばその叙述には修辭などが入る余地がほとんどなく、簡略・単純なものであった可能性が高い。

1 行動

行動に関する内容としてまず注目されるのは「論」（2-⑦，図9）である。これは、碑文においてある主題について論じたという内容があったことを意味している。「論」の字は「迎日冷水里新羅碑」（503年，以下冷水碑と略称）においても確認される（図10）。冷水碑においては、「節居利」なる人物の財産相続をめぐり、「葛文王」¹²⁾をはじめとする新羅六部の代表者7人が協議し¹³⁾、相続人を決定、宣布するという内容が登場する¹⁴⁾。つまり冷水碑の「論」とは、碑文の内容の核心（新羅六部の判決）を導き出すための過程であった。林堂古碑の「論」は碑文の前半部に登場するが、碑文の短さを考えると「論」と無関係な内容が間に割り込む余地はあまりないと考えられ、後半部は「論」の結果に関係する内容である可能性が高い。だとすれば、林堂古碑における「論」もまた、碑文の核心となる主題を導き出す前段階と理解して問題なからう。

そのように考えると、次に登場する内容は、その「論」の対象ということになる。論の次の文字は、左偏はさんずい（氵）とみてほぼ間違いのないと思われるが、右偏は残画から確定するのは困難である。試釈には「水の流れるさま」の意である「洄」（2-⑧）をあげているが、「洄」（さかのぼる，めぐり流れる）、「洄」（水中に物が多くあるさま）、「泗」（川の名）、「河」（川）、「洒」（洗う，注ぐ，深い）なども候補としてあげておきたい。これらはいずれも水に関係するもので、周辺の河川や検出遺構（排水路，



図9 林堂古碑の「論」



図10 迎日冷水里新羅碑

12) 葛文王とは、当時の新羅君主（寐錦，王）につぐ地位にあった者の称号で、王の父や王妃の父が選ばれた。

13) 沙喙至都盧葛文王，徳智阿干支，子宿智居伐干支，喙尔夫智壹干支，只心智居伐干支，本彼頭腹智干支，斯彼暮智干支，此七王等共論教用…（前面3-⑨～7-⑨）

14) 冷水碑は1989年3月に慶尚北道迎日郡（現浦項市）神光面で発見された。詳しい内容については韓国古代史研究会『韓国古代史研究』3（迎日冷水里新羅碑特集号），1990年を参照。

園池)との関係も想定しておく必要がある。続く「百_田得」(2-⑨~⑪)については定かではないが、「得」は「永川菁堤碑」(536年、以下菁堤碑と略称)において長さの単位としての使用例がある¹⁵⁾。これについては後述する。

論をへた後に登場するのはその結果に関する内容であろう。それを示唆する文字としては「与」(3-⑫),「借」(4-②),「令」(4-⑤)がある。与は「与える」や並立助詞(〜と),借は「借りる」などと解釈されるが,前後の文脈がまず把握されねばならない。「令」は使役の動詞と考えられるが,字形からいえば「今」の可能性もあり断定しがたい。

このように碑文は,水にかかわる内容が「論」じられ,それを受けて何らかの決定が下された内容がおぼろげながら浮かんでくる。これらを念頭におきつつ,次に主体(登場人物)についてみていきたい。

2 主体(登場人物)

登場人物との関係でまず注目されるのが「斯彼」(3-⑦)である。斯彼は冷水碑に登場する「斯彼」(前面6-⑧~⑨)と同じものであり,新羅の六部¹⁶⁾の一つである習比部を指す。冷水碑の「斯彼」は,いわゆる新羅の中古期に登場する習比部の唯一の実例であり,碑文に登場する習比部出身の「斯彼暮智干支」は,碑文において「七王」(前面7-③~④)とされる六部の代表者のひとりであった。

中古期の金石文には,人名の列記においても六部の優劣が明確にあらわれている。喙部や沙喙部は新羅の君主と深い関係にあり,高位官人の出身としても登場頻度が高く,彼らの名は六部人名の列記に際してもほぼ一番目に登場する。このように2つの部は6世紀初においてすでに六部の中心勢力であった。それ以外の部としては,本彼(波)が5例,岑喙が2例,斯彼は1例が確認され,漢祗(韓岐,漢只伐)はいまだ実例の報告がない。このように習比部の地位は,当時の六部においてそれほど高くなかったものと考えられるが,林堂古碑により1例があらたに加わった意義は大きいといえよう。

いっぽう習比部の異表記については,慶州の雁鴨池と月城で見つかった統一新羅時代(6世紀後葉~

15) 塙_口六十一得,鄧九十二得,汨広卅二得,高八得,上三得,作人…(2-①~3-⑫)。釈文は朱甫暉「永川菁堤碑」『譯註 韓國古代金石文Ⅱ』(新羅・加耶篇),駕洛國史蹟開發研究院,1992年)によった。

16) 朝鮮の古代社会には「部」と呼ばれる小規模の政治集団があり,それらが離合集散を繰り返しつつ古代国家へと成長していったことが指摘されている。盧泰敦「三国時代の「部」에 관한 研究-成立과 構造를 中心으로-」(『韓國史論』2, 서울대학교 한국사학회, 1975年)。新羅においては六部と呼ばれる6つの有力集団を中心に国家が形成されていった。『三国史記』を基準に六部の表記をまとめると以下の表のとおりである。

資料名	資料の成立年代	楊山部	高墟部	大樹部 岑喙 牟喙	干珍部 本波(彼)	加利部	明活部
中古期碑文	6C初~7C中葉	喙	沙喙				斯彼
日本書紀	720年	喙	沙喙				習部
三国史記(異表記)	1145年	梁部	牟梁部	漸梁部 牟梁部		漢岐部 漢祗部 韓岐部	
三国遺事	13世紀後半	及梁部 沙涿	沙梁部	漸梁部 漸涿	本彼部	韓岐部	習比部
雁鴨池出土磚銘	調露二年(680)					漢只伐部	
雁鴨池出土瓦銘	同上か?						習部 習府

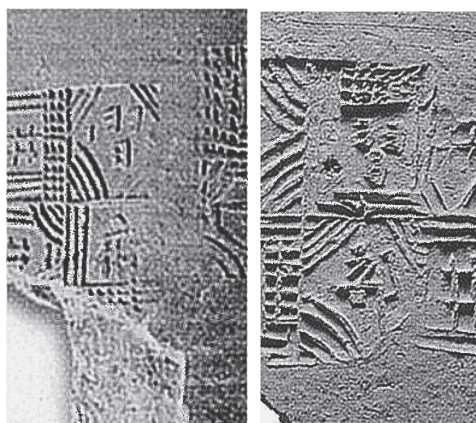


図11 「習部」「習府」銘瓦



図12 林堂古碑の「喙」

935年)の「習部」・「習府」銘の瓦(図11)¹⁷⁾がある。文献史料における習比部の表記は統一新羅期のものに近く、林堂古碑の「斯彼」は冷水碑に近い。これは林堂古碑の製作年代が早ければ6世紀前半までさかのぼる可能性もあることを示唆する。

この斯彼とともに注目されるのが「喙」(3-①, 図12)である。「喙」は右下の部分が剥落してしまっているが、字形からみて喙に近く、六部の一つである喙部を指す字と判断される¹⁸⁾。六部の表記の順においても「喙」は「斯彼」より先行しており、他の金石文資料とも矛盾しない。

そのように考えると、「喙」と「斯彼」の間に入る4文字(3-②~⑤)は、喙部出身者の人名にかかわるものになろう。中古期の金石文資料においても4文字を超える人名(出身部や官職・官位を除く)はほとんどみられず、同碑の表記もまたこれらと矛盾しない。そのように考えれば、斯彼の人名もおおよそ4文字以内に収まる可能性が高いものと思われる。

こうした理解に大過なしとすれば、「斯彼己□□柯」の次に登場する「与」(3-⑥)の解釈において人名を考慮する必要がなくなり、前述した二通りの解釈をあてはめることができよう。まず「与える」の意で解釈した場合、与の前に登場する六部の人物が主語となり、彼らが何かを「与える」相手が存在したことになる。次に並立助詞として「〜と」と解した場合も、六部の人物とは別の人物が登場することになる。いずれの場合にも、六部とは別の人物が碑文に登場することになる。

ならば彼らの名は「与」から碑文末尾にかけて記されていたことになろう。その釈文は「壹借□之令右尺…□其」であるが、判読不能な2文字を除けば喙や斯彼といった六部を指す語は登場しない。金石文資料においては六部出身者に部名を冠するのが通例であり、それが存在しない以上、彼らを六部出身者とはみなしがたく、現地人、さらにいえば林堂地域の在地勢力だと考えるべきであろう。「与」以下に収まるのはおよそ10~13文字であり、これらがすべて人名だとは考えにくい、在地勢力の人名が複

17) 国立慶州博物館(前出書)

18) 喙は注16の表のように喙や啄でも表記される。すべて発音が異なるが、当時は同音の異表記として用いられていた可能性が高い。中古期の金石文において最も多く登場するのは喙であるが、啄や喙にみえる字も登場する。本稿では林堂古碑文の引用に際しては「喙」を、それ以外では喙を用いることにする。

数登場している可能性は十分ある。

最後に考えておきたいのは、「論」の主体である。彼らの名は剥落によって確認できないが、論の結果が六部の官人と関係しているとすれば、彼らの行動について論じることのできる存在としては、碑文の六部人より高位の地方官、もしくは在地の有力勢力（村主）¹⁹⁾などが想定できる。ただ在地勢力は現地において六部人を凌駕する権限を有していたとは考えられても、王京（都である慶州）から派遣された六部官人の行動に対する決定権・命令権を独自に行使できたとは考えがたく、いかなるかたちであれ、六部人が論の主体としてかかわっていたと考えて問題はなかろう。

既存の金石文資料に類例を求めれば、冷水碑の例のごとく、六部の最高権力者集団もしくは君主（寢錦王）などがまず想起されよう。だが石碑の製作技術や書体の粗雑さ、記述の少なさなどからすると、碑文の内容は彼らが直接主管する国家事業とは考えがたく、彼らの名が入る可能性は低いものと思われる。

次の候補として、論の後に登場する六部官人や在地勢力があげられる。この場合、論の主語と後の内容の主語が同一人物になるわけであるが、この短文の中に同一人名が再度登場するというのはやはり疑問が残る。また論とその後の行動の主語が同じであれば、わざわざ論という行為そのものを記録する必要があったとも考えられない。これらの点を考慮すると、論の主体は、これまでにあげた登場人物とは別に考える必要があろう。

碑文第2行目の「論」の上部には6文字ほどが収まると思われ、ここに六部人の名が入ることになるが、問題は人数である。「論」とは基本的に1人ではなく複数の人物によって行われるものであるから、論の主体として2人以上の人物が想定されなければならない。金石文資料においては、同じ部の出身者であれば2人目以降は部名が省略される例もあるため不可能ではないが、やや無理があるのも事実である。第1行の「日」の下に文字の痕跡があることはすでに指摘したとおりであるが、第2行に人名が収まりきらないのであれば、第1行から「論」にかかわる人名が列記されていたと考えるべきであろう。碑文の配置からみて「日」と「論」の間に入る文字は10～12字ほどになる。林堂古碑の人名表記によると六部官人の表記は1人5～6文字であり、おおよそ2人が収まるものと思われるが、在地勢力の存在を考慮すると3人の可能性もある。

以上のように、碑文はおおよそ（A）六部の地方官がある主題について協議（「論」）し（1～2行）、（B）その論をへて六部（喙部、習比部）の官人が在地勢力となんらかの関係を結んだ、もしくは共同で作業した（3～4行）－という2つの内容で構成されている。そして論やその後の行動は、水に関する内容にかかわるものと考えられる。

19) 村主とは在地勢力の長に与えられる官職の一種である。彼らは王京（都である慶州）人とは区別され、王京人の京位に対し、外位と呼ばれる別の体系をもった官位を与えられていた。外位は6世紀から金石文に登場し、7世紀以降、しだいに京位の授与へと転換していったが、村主の号はそれ以降も用いられた。村主や外位に関する研究は多いが、代表的なものに村上四男「新羅外位小考」（『朝鮮古代史研究』、開明書院、1979年）、三池賢一「『三国史記』職官志外位条の解釈－外位の復原」（『北海道駒澤大研究紀要』5、1970年）、権恵永「新羅外位制의 成立과 機能」（『韓国史研究』50・51合、1985年）、河日植「外位制의 整備과 展開過程」（『新羅集権官僚制研究』、慧眼、2006年）などがある。

三 立碑の主体と立碑の背景

1 立碑の主体

石碑を製作し、立てた人物としてまずあげられるのは碑文の登場人物である。彼らについては、前半部（論の主体）と後半部（論の決定事項を実行する六部人と在地勢力）に分けられる。立碑の実行者としては実務にかかわる後者とみるのが妥当にも思われるが、必ずしも両者の共同製作とは限らない。

前述のように、碑石の製作技術・書体・刻字技術は中古期の慶州のものにくらべると粗雑であり、在地勢力による製作の可能性があるが、これは碑文の人名表記からもうかがえる。一般的に中古期の金石文においては「㉖阿良邏頭㉗沙喙㉘音乃古㉙大舍」（「南山新城碑第1碑」2-15～3-5, 591年）や「㉚喙部㉛伊史夫智㉜伊干支」（「丹陽新羅赤城碑」1-13～2-1, 6世紀中葉）の例のごとく、人名は官職（㉖），所属部（㉗），名前（㉘），官位（㉙）の順に表記される^{20）}。官職が記されない人物は少なくないが、官位が省略されることはほとんどない。

これに対し林堂古碑の六部人の表記である「喙起任習㉚」（3-1～5）、「斯彼己㉛㉜柯」（3-6～11）は、部名から始まり、㉜と思われる表現はみられない^{21）}。㉖については「喙」の前に冠されていた可能性も皆無ではないが、現在のところ得の字を含む新羅の官職は例がなく、だとすると「得」（2-12）以下の2文字に官職が入ることになる。「論」にかかわる内容が入る可能性も考慮すると第3行に続く官職名があったとも考えがたい。ただこれに関しては、前述のごとく官職が記されない人名も少なくないため、とりたてて問題視する必要はない。

いっぽう㉜の官位についてはやはり問題が残る。彼らは六部人として同地域に派遣されてきたのであり、当然ながら京位の所持者だと考えられるが^{22）}、上記の人名にはそれとおぼしき表記がない。これについては

- ①官位（地位）をもたない人物であった可能性
- ②官位（地位）の表記に通常とは異なるものが用いられた可能性
- ③書き忘れ

という3つの可能性が想定される。①は冷水碑においても六部人の中に官位が表記されない人物が登場

20) 人名表記法については金昌鎬「新羅中古 金石文의 人名表記 (1)・(2)」(『삼국시대 금석문 연구』, 書景文化社, 2009年)を参照されたい。

21) 「斯彼己㉛㉜柯」の次にくる「与」の字も、官位表記は該当しない。

22) 『三国史記』卷38, 雜志7, 職官上によると新羅の京位は十七ある。やや煩雑であるが上位から列記すると①伊伐浪(或云伊罰干, 或云于伐浪, 或云角干, 或云角祭, 或云舒發翰, 或云舒弗邯)②伊尺浪(或云伊浪), ③迺浪(或云迺判, 或云蘇判), ④波珍浪(或云海干, 或云破弥干), ⑤大阿浪, ⑥阿浪(或云阿尺干, 或云阿祭), ⑦一吉浪(或云乙吉干), ⑧沙浪(或云薩浪, 或云沙咄干), ⑨級伐浪(或云級浪, 或云及伐干), ⑩大奈麻(或云大奈末), ⑪奈麻(或云奈末), ⑫大舍(或云韓舍), ⑬舍知(或云小舍), ⑭吉士(或云稽知, 或云吉次), ⑮大鳥(或云大鳥知), ⑯小鳥(或云小鳥知), ⑰造位(或云先沮知)となる。中古期はこれらの確立期であり, 金石文には異表記が多い。

しており²³⁾、実例として認められる。ただ地方官として派遣されているにもかかわらず無官であるということは、林堂古碑の彼らが高い地位ではなかったことを意味するものといえよう。

次に②の場合、4文字に収まる人名をあえて名と官とに分けるならば、「起任習²⁴⁾」や「己²⁵⁾柯」の後2文字（下線部）を官の表記と考えることもできよう。だがこれは、碑文の官位表記に関する基本知識が製作者になかったことを意味するものであり、在地勢力説の傍証となる。③の場合も、「所属部+人名+官位」という中古期の書式に対する理解不足を意味するものといえ、やはり在地勢力による製作の可能性を高めると同時に、これが六部における公式の碑文ではなかったことを想定せしめる。

このように碑文からは、立碑の主体として六部人（①）と在地勢力（②と③）の両方の可能性が想定される。碑文の内容からみて六部人が重要な役割を果たしたことは間違いなく、①の可能性がまったくないわけではないが、製作・立碑者とは切り離して考えるべきであろう。石碑の製作技術などを考慮すると、現時点では在地勢力による製作・立碑を想定するのが妥当と考えられる。

2 立碑の背景

林堂古碑が水に関する内容である可能性が高いことは既に指摘したが、これを考えるにあたっては、まず林堂洞遺跡の遺構との関係を検討しておく必要がある。古碑が見つかったのはI地区の南端にある石築遺構（排水路と敷石遺構）の西端であり、一帯は低湿地で周囲に排水路、井戸、園池などの遺構が密集している（図2）。建物の柱は根石の上に立てられ、特に2～5号は「門」形に配列されており、同時期に建てられた官衙や邸宅の可能性があるという。

遺構から出土した土器編年は5世紀～9世紀と幅広いが、中心年代は6世紀の第1四半期～7世紀の第2四半期である。本稿で指摘した古碑の製作年代はこの中心年代に含まれるため、遺構との関係をある程度想定してもよいということになる。これが遺構と古碑の直接的な関係を証明するわけではないが、立碑場所の第一候補となるのはやはりここであり、この地に立てられてこそ意味をなすものだったと考えるべきであろう。だとすれば碑文の内容は、自然の河川よりも水利施設、つまり人為的な水利事業にかかわるものと理解しておくのが妥当と考えられる。

水利事業という点からあらためて注目されるのは、中古期における2つの石碑である。その一つが、前述の菁堤碑（図13）²⁴⁾である。菁堤碑は高130cm、幅93.5cmで、永川市道南洞にあり、六部の下級官人が7000人を動員して「塙」²⁵⁾を築いた内容が記されている²⁶⁾。碑文の「丙辰年」は536年とするのが定説であり、菁堤の名はこの「丙辰年」の碑面の裏に刻まれた銘文（唐・貞元十四年、798）にある「菁堤治記」の語にちなんでいる。

古碑との関係で注目したいのは菁堤碑に登場する「得」の字である。「得」は菁堤碑において長さの単位であろうということは従来から指摘されてきたが、得の字にそのような意味はない。いっぽう同字を

23) 「喙沙夫那²⁷⁾利，沙喙蘇那支」（「冷水碑」後面5-①～6-③）。

24) 芸術の殿堂『옛 拓本の 아름다움, 그리고 우리 歴史』, 1998年

25) 塙は「堤」を意味するが、貯水池とする見方もある。朱甫噉（前出書，1992年）

26) 発見の経緯については鄭永鎬「永川菁堤碑の発見」（『考古美術』102，1969年）。研究史については李宇泰「永川菁堤碑를 통해 본 菁堤의 築造와 修治」（『迎太燮博士華甲紀念史學論叢』，1985年）を参照

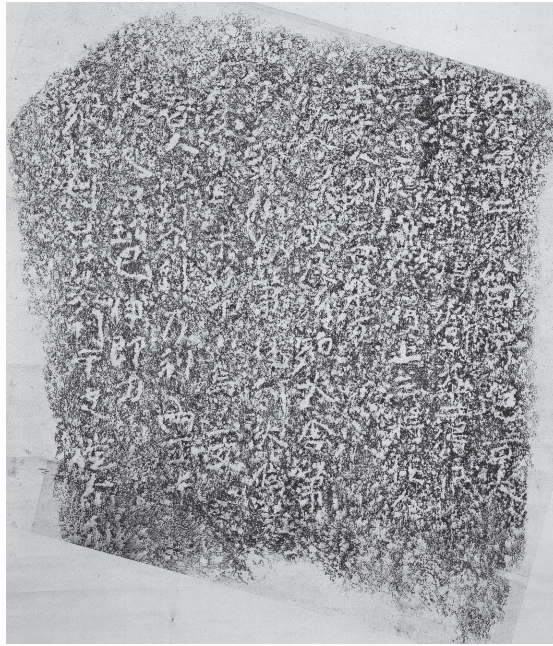


図13 永川菁堤碑

長さの単位を意味する「尋（尋）」だとする見解²⁷⁾があり注目される。字形からは「尋」ではなく「得」とすべきであると思われるが（図14）²⁸⁾，当時の刻字技術や漢字の教養などを考慮すれば，にかよった「尋」と「得」の字が厳密に区別されなかったともいえ，「得」が尋の異表記である可能性は高いといえよう。いっぽう林堂古碑にみえる「得」をみると，直前に「百田」（2-⑨～⑩）の2文字がある。百は数詞であり，断定は避けたいが「田」は「壹」の上部に該当する可能性もある。「百田得」が長さであるとすれば，それは水利施設の長さを指すものであっただろう。

6世紀の水利事業に関するもう一つの石碑が「大邱戊戌塙作碑」（578年，図15²⁹⁾、以下塙作碑と略称）である。碑は1946年に大邱市大安洞で発見され，現在は慶北大学校博物館に保管されている。碑石は高



図14 菁堤碑の「得」（左から2-⑥，2-⑪，3-⑩）

27) 李宇泰（前出書）および「新羅의 水利技術」（『新羅文化祭学術発表会論文集』13，1992年）

28) 芸術의 殿堂（前出書）

29) 国立慶州博物館（前出書）

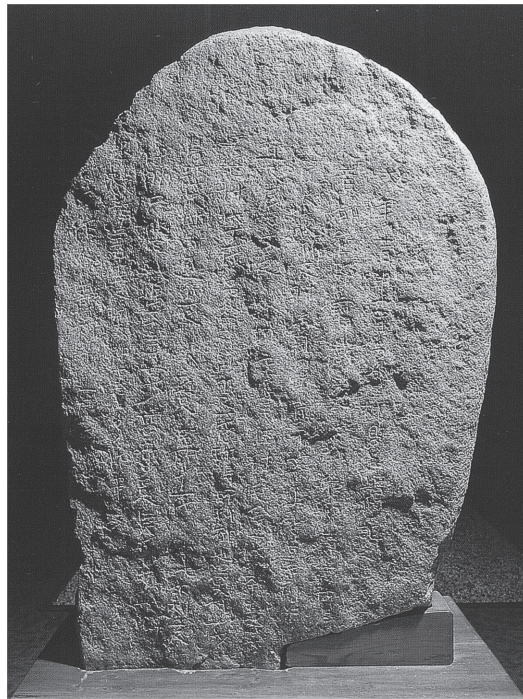


図15 大邱戊戌塙作碑

103cm, 幅65～53cm, 厚12cmで, 六部官人が中心となり, 現地の有力者や村民を動員して塙を造成したことが記されている³⁰⁾。六部官人には「都唯那宝蔵阿尺干」など僧侶とおぼしき人名もみられ, 当時の技術者集団を考える上で興味深い。

これら三碑は内容だけではなく, 地域的にも共通している。林堂古碑を中心にみると, 菁堤碑は東北に約20km, 塙作碑は西に約15km離れた場所で見つかっている。三碑はいずれも慶州から大邱に向かう地形の平坦なルート, つまり慶州—永川(菁堤碑)—慶山(林堂古碑)—大邱(塙作碑)間における在地勢力の拠点地域であり, 交通の要衝であった。菁堤碑についてはすでに531年の堤防修理の記事³¹⁾との関連性が指摘されているが, 三碑と水利事業のあり方を考えると, その事業は特定の時期に大規模に展開されたのではなく, 王命以降, 少しずつ範囲を広げながら進められていったのである。林堂古碑は, 大邱—永川間の地理的空白を埋めるとともに, 6世紀代にこの一帯で広範な水利事業が実施されていたことを示す貴重な追加資料といえよう。

ではこうした空間的な理解に対し, 三碑を時間的に位置づけることは可能であろうか。それを考えるうえで指摘しておきたいのが, 菁堤碑と塙作碑に登場する塙の長さの単位である。碑文は判読が困難であるが, 前述のように菁堤碑の単位は「得」であり, 塙作碑には「高五歩四尺」(7-⑫～⑯)の文字が確認される。二碑を隔てるおよそ40年の歳月の中で, 従来「得」であった塙の単位が「歩」と「尺」に取って代わられているのである。

30) 発見の経緯については任昌淳「大邱에서 新發見된 戊戌塙作碑 小考」(『史学研究』1, 1958年), 研究史については朱甫墩「大邱戊戌塙作碑」(前出書, 1992年)を参照されたい。

31) 『三国史記』巻4, 新羅本紀4, 法興王18年(531)。「春三月, 命有司修理堤防」

二碑の水利事業が六部官人によって主導されたことを想起すれば、この変化の背景には、六部つまり都における基準単位の変更があったとみてほぼ間違いない。新羅においては520年に「頒示律令」の記事³²⁾がみられる。これが成文法を意味するものであろうことは以前から指摘されてきたが³³⁾、1978年発見の「丹陽新羅赤城碑」（6世紀中葉）、「蔚珍鳳坪新羅碑」（524年、1988年発見）、冷水碑（1989年発見）など新出の金石文資料によってさらに明確になったといえよう³⁴⁾。菁堤碑と塙作碑はいずれも520年以降の内容であるが、この間に制度が改められたとしても特に問題はなかろう。林堂古碑を含む三碑は距離的にもさほど離れておらず、またいずれも六部の人間がかかわっているため、旧制が単位において固守されていた可能性はさほど高くないと考えられる。林堂古碑の「得」が長さの単位として認められるのであれば、その製作年代は578年より前と考えられ、六部による水利事業が新羅の北進ルートの一つに沿って順に展開していく様相ととらえることもできるが、現時点において断定は避けたい³⁵⁾。

このように林堂古碑は、永川——慶山——大邱にかけて広範に展開していた水利事業にかかわる内容を記載したものである可能性が高いことが分かった。ただ同碑は在地勢力による製作と判断され、いわゆる菁堤碑や塙作碑のような六部主体の大規模事業とは性格を異にするようにも思われる。

おわりに

これまでみてきたように、林堂古碑は6世紀に製作されたもので、碑文は新羅六部と在地勢力が行った水利事業に関する内容である可能性が高い。

6世紀における水利事業の展開は、地方官の派遣ともかかわっているものと考えられる。考古学の見地からも、これらの地域の首長らは、すでに4～5世紀の段階で慶州を上位とする政治的な結びつきがあり、6世紀を前後して慶州からの地方官の派遣が本格化するに伴い、次第にその独自性を失っていったと考えられている³⁶⁾。つまり同地域は、6世紀初めには成立していた六部（慶州）との上下関係を背景に、六部の地方官と在地の有力者（村主など）が並立する状況にあった。そのもとで、六部の下級官人を主体とする水利事業が進められていったのである。

開発とは、技術の保有者が長期にわたって現地に滞在することが不可欠であり、彼らの派遣は、地方官と在地有力者（村主など）との政治交渉、合意なくしては不可能である。技術者官人の思惑がいかなるものであれ、六部出身者が地方官として周辺地域に進出していく過程において、水利・土木の技術力が少なからず貢献し、地域社会における主導力を確保していったことは否定できないであろう。その中

32) 『三国史記』巻4、新羅本紀4、法興王7年。「春正月、頒示律令」

33) 武田幸男「新羅・法興王時代の律令と衣冠制」（『古代朝鮮と日本』、龍溪書舎、1974年）。

34) 朱甫瞰「蔚珍鳳坪新羅法興王代律令」（『韓国古代史研究』2、1989年）、武田幸男「新羅・蔚珍鳳坪碑の「教事」主体と奴人法」（『朝鮮学報』187、2003年）

35) ただ『三国史記』の記事（665年）によると、尋（尋）は長さの単位として7世紀中葉まで使用されていた。「絹布旧以十尋為一匹、改以長七歩・広二尺為一匹」（巻6、新羅本紀6、文武王5年）

36) 新羅地域の考古学研究において最も重要な編年基準とされているのは土器であるが、特に4～6世紀にかけての土器編年には、研究者によって1世紀ほどのひらきがある。

において、喙部とともに「斯彼」部の人間が存在していたことは、当時政治的にはすでに下位に位置づけられていた習比部の性格についても多くの示唆を与えてくれよう。林堂古碑、菁堤碑、塙作碑は、政治交渉の結果としての技術者集団の進出、彼らと在地勢力との交渉、そして技術の伝播を物語る貴重な資料である。ただ林堂古碑の製作は在地勢力の手によるものと判断され、残りの二碑とは水利事業へのかかわり方が異なっていると思われるが、これについては今後の課題としたい。

本稿は林堂古碑の本格的な釈読としては最初のものであり、今後検討・批判されるべき余地を多く残していると思われる。今後の研究進展に多少なりとも寄与するところがあれば幸いである。

最後に、本稿の作成においては石碑の図面を大いに活用した。筆者の力量不足から利用には限界があったものの、いくつかの情報を得て、筆者なりに年代の参考資料とすることができた。石碑は文字のみが活用され、考古学的研究や実測の対象としては高く評価されてこなかったように思われる。だが木簡研究の進展にみられるように、計量学的データは貴重な情報源であり、その蓄積が研究に寄与するところは大きいと思われる。石碑の実測例が今後さらに増えることを期待したい。

付記：林堂古碑の調査および資料の提供にあたっては、嶺南文化財研究院の朴升圭先生、禹炳喆先生から多大なご配慮を賜った。厚く感謝の意を表する。